

井原西鶴の作品に見る江戸の町

ダニエル・ストリューヴ

1

上方、大阪の町と不可分な人物とみなされることの多い井原西鶴(1642-1693)は、大阪に生まれ、新しい商人文化の中心地としてこの地の知名度を上げることには貢献した。しかし西鶴の活動範囲はこの地にとどまることはなく、その作品からは日本の他の土地、とりわけ大阪と同様巨大な中心都市であり、全国から訪れる人々の行き交う場所、そして政治の中心地であった江戸にも関心を示していたことがうかがえる。その意味では、西鶴は地方作家とは形容し難い。大阪は17世紀後半に国内の重要な商業都市となり、多くの取引所や国内初の米市場が表れる。天皇の御所が置かれ、当時はまた国の芸術・文化の中心地であった京都からも、大阪は一日で行ける距離にあり、また江戸にも米や酒、織物を始めあらゆる種の手工業製品など大量の商品を送り込んでおり、絶えず交流があった。こうした経済的な繋がりに加え、俳諧の流派などによる文化交流もあった。俳諧は当時かなり流行し、西鶴もその中心的な役割を担っていた。西鶴が俳諧を始めた延宝年代(1673-1681)、都の古い流派に対し、大阪や江戸に独立した俳諧の中心地ができ、それらは自分たちの殻に閉じこもることなく国中に繋がりを広げていった。文学の交流は、印刷技術の発達によって促進された。西鶴は大阪におけるその推進者であり、自分の俳諧集をまず大阪で出版した。最初の小説『好色一代男』(1682)は大阪の無名の版元から出され、その後菱川師宣の絵本として1684年江戸で再び出版された。これが評判を得ると西鶴は1686年、作品のさらなる普及のため、また重版類版を防ぐ目的もあり、大阪、京都、江戸の複数の書肆との相版を取り入れる。しかしこうした現象は文学に限らず、演劇など他の多くの芸術、文化活動にも見られるようになる。西鶴とその小説は、大都市の内部、あるいは諸大都市間における活発な交流の産物であったといえる。彼は大阪商人階級の代表格というより、国中に枝葉を広げる文学という共同体の一員、職業としての文人と捉えたほうが適切であろう。

2

元禄時代の文化のこうした多極的な性格は、この時代の文学作品、とりわけ西鶴の短編集に反映されている。ほとんどすべての作品に同じ構成上の特徴、つまり各章の筋が、それぞれ異なった場所で展開されるという特徴が見られる。この構造は、1685年に出版された3冊目の作品、『西鶴諸

国ばなし』の明白な構成原則となっている。編纂者として登場する架空の人物は序章で、「国々を見めぐりて、はなしの種をもとめぬ」¹と述べている。またこの作品には「大下馬」という内題がついているが、これは江戸城の城門前の馬から下りる場所を指し、お供の者たちが国中の話を交換したとされる場所である。同様に『懐硯』の序章でも、編纂者は旅の途中様々な場所で聞いた話を集めたと言っている。しかし実際は、主人公世之介が諸国漫遊する最初の小説『好色一代男』から、西鶴のほとんど全ての短編集が、形を変えながら同様の仕掛けになっているのである。そこに「並列」と「行程」という相補的な二つの原理がはたらく。「並列」の特徴は、大下馬という題材に象徴されるように、一冊の作品の中に様々な場所を舞台にした話が盛り込まれているという点である。それぞれの街、場所が互いの違いやそれぞれの独自性、あるいはまた互いの類似性をともなって、他の土地を背景に写し出される。したがって江戸、京都、大阪の話は、互いに地名を入れ替えてもある程度は通じるのである。それぞれの町が大都市の特徴、もっと一般的に言えば、多様ではあるが本質的には変わらない人間たちの住む場所を表している。また一方で互いの違い、それぞれの特性、同時に欠点を描き出しており、そういった観点がなければ我々は都市を正確に把握することはできない。西鶴はそれを、この三大都市の遊郭(当時日本の三大遊郭であった)を例として説明している。他の作品と同様、『諸艶大鑑』(1684)でも大部分が島原、新町、吉原における話が代わる代わる語られているが、「鴉ばかりを似たと思へば、島原の別れも、吉原の『おさらば』といふ声も同じ物」²と言っているように、どこも同じだと結論づけている。しかし場所によって作法は異なり、客がそれぞれの場所の良し悪しを感じ取れるようそれぞれに特性があり、結果他の二つの遊郭と全く同じようになるか、あるいは理想ではあるが存在し得ない場所が現れる(「京の女郎に江戸の張をもたせ、大阪の揚屋で会はば、この上何かあるべし」³)と言っているように、理想ではあるが存在し得ない場所が現れる。一つの場所が常に他の場所を喚起させるのである。主人公世之介が京都の西、日向の風呂屋を訪れる巻1の6は、有名な勝山の話が終わりに出てくる。湯女であった勝山は、その後江戸の吉原で遊女となり、「丹前風」を始めた人物とされている。また、地方の遊郭で遊女と一夜を共にした後、世之介が思いを馳せるのは、近づくことのできない江戸の高級遊女、高尾であった。結局、主人公が小説の最後で、あらゆる快樂を味わい尽くした日本を離れるとき、こうした開かれた物語構成が再び繰り返されるのである。

3

このように、異なる場所を並列して描くことで緊張感、躍動感が生じる。さまざまな場所が作品中に網の目のように配置され、そのつど物語に段階を形成していく。『好色一代男』の世之介の諸国放浪は、登場人物たちの移動によって旅の行程や名所が描写されるという、仮名草子ですでに使われていた仕掛けを取り入れたものである⁴。色事への情熱、それによって金銭は常に欠乏し、世之介を新しい土地へと駆り立てる。こうした放蕩に業を煮やし、世之介の親は息子に江戸で家業の支店を任せることにする(巻2の5)。その後「奴」の一人として再び江戸に戻り(巻4の4)、その後父親の莫大な資産を相続すると、あらゆる金銭問題から解放され、世之介は再び時折江戸に赴くようになる。西鶴の他の物語の中で、江戸はしばしば旅の最終目的地あるいは出発点として描かれる。これは当時幕府の置かれていたこの新しい都市と、その他の地方との関係を反映したものと見える。用事や奉公、娯楽、逃避、あるいは世之介や町人物の話に出てくる多くの主人公のように、家族から勘当された時、または成功し財を成すために、人々は上方から江戸へ向かう。そして故郷に帰るため、あるいは東北や上方に行くため、江戸を去るのである。西鶴の作品に表れる江戸という都市のイメージを把握するには、江戸の都市そのものの中で考えるのではなく、当時の国のネットワーク全体から江戸の存在を捉えたほうが適切であろう。

そして、均質からはほど遠い雑多な空間であった江戸の都市は、類似や対比、集結と分岐によって成り立つ、それ自体が巨大な網目であった。江戸の分岐点は数多くあり、それらが繋がって道を構成していた(『好色一代男』巻2の6)。長い放浪の末江戸にたどり着いた世之介は、こうして遊郭から遊郭へと渡り歩く。他にも様々な経路があり、京都では田圃を抜ける朱雀の細道が島原の構成要素をなしていたように、浅草寺へ続く道、浅草寺から吉原へ続く有名な日本堤を通る経路(『諸艶大鑑』巻4の1)、あるいは多くの人の行き交う活気に満ちた歓楽街から、築地のような郊外の人気のない貧しい地域へ続く道(『懐硯』巻1の3)もあった。東海道の終着点品川は、江戸で一儲けしようとして結局失敗した人々のたまり場となっていた。また浅草寺付近は、故郷と縁を切った武士が身を寄せに来る場であった。こうした点から、西鶴は小説的、娯楽的要素と地理的描写を組み合わせる仮名草子の伝統を継承しているといえる。

4

江戸が占める位置は作品によって変化する。『好色一代男』では、54話中5話、つまり全体の9.5%が江戸を舞台

に展開する。1694年に出版された、主に三大遊郭が中心に描かれた『諸艶大鑑』では40話中12話、つまり30%が江戸を舞台にしている。『西鶴諸国ばなし』では11.5%(35話中4話)と減るが、『好色一代女』と『日本永代蔵』では20~21%(24話中5話・30話中6話)と若干増え、『男色大鑑』では40話中6話、つまり15%となっている。一方で、江戸が舞台としてそれほど登場しない物語もある。『本朝二十不孝』では、最後の章のみ江戸で展開し、同様のケースが『世間胸算用』に見られる。『懐硯』では結びの章を含む2章に江戸が現れ、『武道伝来記』及び『武家義理物語』では、江戸についてはほとんど語られず、話の舞台として登場するのはこの内『武家伝来記』巻5の3のみであるが、そこでも登場人物たちは佐渡島の出身で、彼らの喧嘩は浅草周辺で決着をつけてはいるが、故郷で起こったもめ事がそもそもの原因になっているのである。

こうしたデータを仔細に検討するには、それぞれの作品を比較し、さらに掘り下げた研究が必要となってくるが、ここでは物語集の大半で江戸が占める重要な位置を確認するために(物語によっては非常に多くの場所を組み込んでいるものもある)、いくつかの一般的な考察にとどめたい。武家物の『武道伝来記』と『武家義理物語』の場合、例外的に江戸を舞台にした話が少ないという事実は、著者の慎重さの表れとみることができる。つまり、武士道というのは徳川時代の日本においてはデリケートなテーマであり、西鶴は創作の参考にした事件を一貫して作り変えていた⁵。しかし他の小説の中に江戸の武士が登場するものがいくつかあり、とりわけ『男色大鑑』の前半では將軍の臣下まで登場させ(巻3の4)、『好色一代女』では大名の好色生活も題材としている(巻1の3)。要するに、まさに武家物のテーマが武士道という公のイデオロギーに触れることから、西鶴は慎重さを見せ、武家物の話を江戸で展開させることを控えたのだと考えられる。儒教思想が中心概念となっている『本朝二十不孝』に関してもおそらく同じで、ここでは江戸は小説を締めくくる華やかな最終章に唯一登場するのみである。一方『世間胸算用』の場合は、文学的な動機が見て取れる。惨めな状況にいる名も知れない人物たちを描くこの物語集は、多くは大阪、あるいは上方を舞台にしているが、出来事の位置関係に関しては曖昧なままである。堺、奈良、長崎、江戸といったいくつかの都市は最後の方に出てくるが、ここでは多様性よりも連続性が重視されている。ここでも江戸はただ一度だけ最後の話の舞台となっており、他の話に登場する惨めな商人たちの涙ぐましい攻防と大きな対照を成しているが、それは江戸の華やかさ、繁栄の象徴としての性格のためである。

西鶴が作品中に場所をどのように配置したかを詳しく見

てみると、一般的に語られる出来事とそれが起こったときされる場所の密接な関係が浮かび上がってくる。そこから江戸という都市の捉え方における主な特徴を引き出し、商業都市江戸、武士の都江戸、吉原の江戸といった江戸の持ついくつかのイメージを捉えることが可能となってくる。そしてそのような多様性から、西鶴の小説世界における「東」の中心点としての江戸の機能と意味を導き出すこともできるのであるが、本論ではその内の二つの側面に絞りたい。

5

江戸は勝山や高尾といった太夫の記憶と共に、作品の中で遊郭を想起させるものとして描かれ、この分野では常に京都と対を成すものとして紹介される。島原の洗練さはなくとも、吉原にはもっと力強い固有の優雅さがあり、京都の人々にとっては斬新で魅力的なものであった。江戸で展開する物語には、英雄的な要素の色濃い江戸の歌舞伎や浄瑠璃の世界と結びつくこともあり、小説的な要素が介入してくる。例えば『好色一代男』の巻4の4では、浄瑠璃の詞章を真似た滑稽味のある文体で、世之介と大名屋敷の下女と束の間の情事が描かれている。女は世之介が芝居の木戸口に入ろうとするところに近づき、敵討ちに手を貸して欲しいと懇願するが、実は密会のための言い訳であった。男性人口が圧倒的に多い江戸の中で、男性に近づくことのできない女性たちが待ちわびる大奥や、唐犬権兵衛を頭にした町奴（世之介も一味である）が練り歩く興行街の話、そして男傾城にまで成り下がる世之介と下女の情事の物語は、京都や大阪とは異質な世界、まやかしや意外性が支配する倒錯した世界に我々読者を引き込んでいく。ここでも他の西鶴の小説と同様、江戸は開かれた都市、無秩序が支配する不均衡と不均質の空間として描かれ、伝統の重圧が束縛する上方と対比して、江戸を生命力に溢れる都市にしているのである。

『諸艶大鑑』でもまた、このような江戸に特有な小説的要素が引き立っている。巻2の1と4では、遊郭へ向かうために船頭に一日に金5両も支払い、あるいは新しく勤めに出る若い遊女（新造）の初披露目に、上方では考えられないような散財をする江戸の人々の浪費癖について語られている。次に続く章には、しばしば理想化される主人公たちの英雄的な話が多く盛り込まれ、彼らの武士道精神は武士の都江戸の特徴をよく表している。巻3の2は、正直で欲のない船頭が、船の中に忘れられていた財布を自分の物にせず持ち主を見つけ出し、後に有名な遊女の常連客となる話である。巻4の1では、商人たちが遊女をめぐるって武士らに命を狙われ、その後難を逃れたことを盛大に祝って先ほどの恐怖の埋め合わせをするという話である。巻4の

4では、太夫が店の使用人に惚れ込み、一緒になるために波乱へと身を投じる。そして巻7の4では、嫉妬深い太夫が、彼女を買った男を大事にするあまり執拗に責め、江戸中を追いかけて駿河まで着くと、彼女の亡霊が富士山の上に現れる、という話である。このような現実離れた独特の雰囲気は、他の物語集にもあらわれる。『西鶴諸国ばなし』の中に、身分の低い男に惚れた武士の娘が駆け落ちし、家族の責めに対し愛の作法を貫くという有名な話がある（巻4の2）。また、おそらく西鶴の小説で最も有名な話の一つである『好色五人女』（1686）巻4も挙げられる。火事後、寺に家族で身を寄せていたお七は、そこで若い武士の吉三郎に惚れる。愛する者に会えないお七は、再び吉三郎に会うために町に火をつけ、死刑に処せられることになる。

此女、思ひ込し事なれば、身のやつる事なくて、毎日有し昔のごとく、黒髪を結せてうはしき風情、惜や十七の春の花も散々に、ほととぎすまでも惣鳴に、卯月のはじめつかた、最期ぞとすすめけるに、心中更にたかはず、夢幻の中ぞと一念に仏國を願ひける心ざし、去迎は痛しく、手向花とて、咲おくれし櫻を一本もたせけるに、打詠て、「世の哀春ふく風を名を残しおくれ櫻のけふ散し身は」と吟じけるを、聞人一しほにいたまはしく、其姿をみおくりけるに(...)

（この女はかねてから覚悟をしていることであるから、少しもからだのやつれることもなく、引回しの日も以前の通りに黒髪を結わせて、麗しい風情であった。惜しいかな、十七の春の花もちりぢりに散っていき、ほととぎすまでもそれを悲しんで鳴き立てる四月の初めのころ、いよいよこの世のお別れであると覚悟を促したところ、少しも心を取り乱すこともなく、人の一生は夢幻にすぎないといって、ただひたすらに極楽往生を願っていた心中は痛ましい限りであった。手向けの花といって咲き遅れた櫻を一枝もたせると、じっと打ち眺めて、「世之哀れ春吹く風を名を残しおくれ櫻の今日散りし身は」と辞世を詠んだのを聞く人たちは、ひとしお痛ましい思いで、引かれていくその姿を見送った。）⁶

火刑によって死を迎えようとする女の、この驚くほどの晴れやかさには、社会の階級や厳しい要求に対する、愛と自分自身への忠実さの勝利がうかがえ、不屈の精神を余すことなく表しつつ、同時に江戸のもつ小説的な雰囲気を要約しているといえる。『懷硯』の最終章には、似たテーマで喜劇的な作風の話がある。舞台は桜の季節である。

(...)上野の春に^{あへ}値り。さながらよし野を爰に、花の都もおよばざりし気色、黒門^{きき}向より末の松陰まで、唐織の^{まんまく}幕うたせ、袖^{がさ}累ねの衣装づくし、鹿の子ならざる小褌もなく、美をかざりての女酒もり、撥音の色糸、あるは^{よざり}一節切に吹たてられ、裾かへしの^{もみうら}紅裏などほの見え、かかる法師の身さへ心うかうかとなりぬ。

(上野の春にちょうど出会った。さながら吉野をここに移したようで、花の都も及ばないような景色である。黒門先から遠い先の松陰まで、唐織の幔幕を張らせ、袖重ねの衣装尽くし、鹿子でない小褌もなく、美々しく飾り立てて女たちが酒盛りをしている。三味線の撥音の華やいだ音色、あるいは一節切りを吹く音色に心も浮き立ち、折りしも吹きたてる春風に裾がかえり紅裏などがちらりと見えたりして、自分のような法師の身でさえ、心が浮き浮きとしてくるのであった。) ⁷

宴の最中に、目を奪うほど美しい青年が現れて若い衆の間に座り、そのうちの一人の伽羅屋を誘惑する。他の皆が散り散りに去り二人の若者が残ると、この見知らぬ青年は相手に、実は自分は女だと告げる。変装は目をつけた男性へ近づくための手段だったのである。『懷硯』の最後を飾るこの話と歌舞伎の世界との類似性に、読者は驚かされるはずである。ここでの花は本物の花というより、むしろ木々の間に広げられた色とりどりの布である。見知らぬ若者の登場と彼の不思議な落ち着き、そして若い女への変身は、歌舞伎の舞台から飛び出したかのようなシーンである。

6

江戸は国中の人々を引き寄せる場所であった。浅草など都市周辺に身を隠しにやってくる多くの浪人たちが住む江戸は、江戸より発展はしていても伝統や築かれた身上の重みが社会的な昇格の機会を阻む上方を離れ、財を成しにやってくる多くの商人の集う場所でもあった。『西鶴諸国ばなし』の最後に、『百物語』(1659)にも書かれ当時有名になったある話が出てくる。大阪に住む正直だがお人よしの男が、江戸では「銀が拾える」という言葉を字義通りに受け止めて江戸に向かい、町中を歩き回っていくつかの小銭等を拾い集める。その姿に同情した友人たちはそこで、金を出し合って彼の通る道に金貨を撒き、男はついに財を成すというもので、「物事正直なる人は、天も見捨てたまはず」⁸という格言を物語る話である。

この話は当然のことながら皮肉な調子で描かれている。西鶴の生きた時代の江戸は、寛文時代(1661-1673)のように全てが未完で、成功が容易だった時代ではもはやなかった。『日本永代蔵』巻2の3では、京都の若い跡取りが

親から勘当され江戸に下り、江戸の一步手前の品川で非人の一味に出会う。彼らは男に不幸の数々を話し、競争が激しく、資本金なしには何もできないこの江戸で運を試すのは思いとどまるよう勧める。金貨は本義においても転義においても、江戸の町には落ちていないのである。しかし若い跡取りは成功することになる。後に知り合った人に、「男の働くべきところはここなり」と言って励まされるのである。物乞いから「切り売りの手ぬぐい」という職の提案を受け、10年間必死に働いた末に財を成す。同様に巻3の1の主人公は、自分の流儀で金を手に入れる夢を叶える。「処は大江戸なれば、何をしたらばとて、商いの相手はあり」と彼は自分自身に言う。「めづらしき見立て」を持ってば十分なのである。そこで男は、絶え間なく人の流れる通町沿いの日本橋の袂に立つ。金貨は見つからなかったが、大工の一行が木材を落としていくことに気付く。これを集め、彼は財を成したのであった。民間説話に出てくる無邪気な信心や正直さよりも、根気強さと発想が成功へと導く。江戸の不思議な力は、その都市内部に抱える巨大な人口と、その過密さから生み出される可能性によるものなのである。こうした数の論理を理解し、江戸という都市が生み出すチャンスを自分のために使うことのできる者が成功するのである。

西鶴の小説は、当時の紋切り型の話、大量に創作された仮名草子の中に記されているような、民間で伝承される話を出発点とした。しかしこうした紋切り型を、西鶴の作品群が織りなす連想、交換、対比の網の目に入れることで変形させた。都市そのものより、そこに住む「人々の心」が西鶴の意識を捉えたのであった。『日本永代蔵』巻4の4で主人公は、町のほとんどを焼き尽くした明暦の大火(1657)の後に、住民ほぼ全員が災害前の職業に戻り、町がまた元の姿を取り戻したことに驚嘆している。ただ一人、数珠職人だけが火事の混沌にまぎれて道で金を拾い集め刀職人になろうと目論んだが、成功は長くは続かず、またすぐに元の職業に戻るのである。このように江戸は、単なる物理的現実、つまり火事によって焼き尽くされるかもしれない、あるいは偶然によって簡単に混乱に陥るかもしれない単なる一つの風景なのではなく、何よりひとつの「精神」なのである。道で集めた金という主題のこうした最後の逆転は、西鶴の小説世界が「人の心」を中心に据えていることの証明であり、江戸はそうした人の心の対立と掛け合いの舞台なのである。

¹ 対訳西鶴全集 5、p.3.

-
- ² 対訳西鶴全集 2、p.27.
³ 対訳西鶴全集 1、p. 175-176.
⁴ 『竹斎』(元和年間) や浅井了意の『東海道名所記』(1660 年頃) 等。
⁵ 谷脇理史 「『武道伝来記』における諷刺の方法—その一側面」(『江戸文学』第 2 号 1990 年 2 月) を参照。
⁶ 対訳西鶴全集 3、p. 109-110.
⁷ 対訳西鶴全集 5、p. 298-299.
⁸ 対訳西鶴全集 5、p. 138.

(翻訳・梶浦 彩子(翻訳者))